



生きるそばからツバを吐き  
かけるのはやめてくれない  
か

---

---

sakamoto

---

## 目次

---

1. 風景
2. 流れる
3. 国道16号線
4. 泣くな 君
5. 平井さん
6. 生きるそばからツバを吐きかけるのはやめてくれないか
7. 二十の春
8. すずかけの道
9. ねえ 母さん
10. 明日出かけて行く
11. ガリガリくんを知らない人はいても彼女を知らない人はいないんだし
12. 次の一日
13. 哀れな女
14. がんばってここに来いよたかおちゃん
15. それでヤマダ電機だ
16. アンバサダーホテル
17. 見えない雨が降る
18. 見えない雨が降る 2
19. 見えない雨が降る メリーな日々
20. バハマ
21. バット
22. 轟 渡
23. あとせんにちいきれるぐれえーのえねるぎーがじゅうでんされたきぶんなんだよ

## 風景

---

アンティークな風景が折り重なって  
昼と夜を唯一貴重な存在に仕立て上げ  
かすかな祈りをもつ少年の輝きを  
わずか1世紀のあいだに消し去ろうとしてしまっている  
われわれが少年であろうはずもなく  
また 風景でもない

ふとしたはずみで夢は息を吹き返すが  
ほとんどの人たちの間でうわさになることもなく  
少年の部屋の片隅で待つまぼろしが  
かつてそうであった人たちと懐かしげに話しをしているだけで  
そこには風景はなかった

## 流れる

---

彼と彼女が長い川を泳いでやってくる  
私と私の家族は手を振る  
どうしてだろう とても静かな朝だった  
川原には憤りと繁栄が無造作に置かれていたが気にはならなかった  
川岸から誰かが彼と彼女に呼びかける  
「ここにとどまって暮らしを満喫してみませんか」  
彼と彼女は泳ぐのを止めこう呟く  
「流れることはそこに止まることなのに」と

川底が変わる様を眺めながら彼と彼女は泳いでやってくる  
私と私の家族は水の冷たさも川の深さも知らなかったが  
彼と彼女の戸惑いは容易に想像できた  
彼と彼女は時に昨日までの行為に溺れたが  
溺れて薄れゆく意識の中でさえも明日のぬくもりを感じとることができた  
再び誰かが彼と彼女に呼びかける  
「ここにとどまって暮らしを満喫してみませんか」  
彼と彼女は泳ぐのを止めこう呟く  
「流れることはそこで暮らすことなのに」と

## 国道16号線

---

国道16号線を

遠くなってしまった思い出に向けて車を走らせる

ガードレールの向こう側では

平穏と感激で変わることはない景色が見え隠れし

「ごきげんよう」が飛び交っている

僕は不安にハンドルを取られながらも

君の腰つきのせいで

清々しく満ち足りていた

あなたに生きる勇気がありますか

僕に生きる勇気を下さい

国道16号線を

遠くなってしまった思い出から逃れるために車を走らせる

ガードレールの向こう側では

永遠が永久でないことに気づき

昨夜までの幸せの尺度が

今朝のコンビニの規格に合わなくなってしまったことで慌て

右往左往していた

僕は傾向にハンドルを取られながらも

君の存在がうれしくアクセルを踏み続けた

一刻も早く君に会いたいと思う

会っている時が永遠であればと思う

## 泣くな 君

---

泣くな 君

それで終わるわけじゃないから

泣くな 君

次のボールが飛んでくるから

泣くな 君

いま始まったばかりだから

泣くな 君

これからのほうがたいへんだから

泣くな 君

僕も泣きたくなるから

泣くな 君

ほら 友達がそう言ってる

泣くな 君

落ち込んでるひまはないって

下を向くなって

顔を上げろって

残念だけど

泣くな 君

がんばれって言ってる みんなが

だから 泣くな 君

平井さん

---

そんな風に考えているなんて思ってもみなかったよ  
だってそうだろ 新聞にはいつだって真実は載ってないって言ってたじゃないか  
殺人事件の半分は巧妙に仕組まれた自殺願望者のプランだって話 してたじゃないか  
オレ達を読まされているのは事実に似た幻想だって  
だから なんでそんなところを気にするんだよ  
一面の天気予報欄なんて

山手線が不通になったって 秋葉原で少し考えれば経路はいくらでもあるぜ  
それに知ってるかい 東京ってものすごく狭いんだ  
山手線内なら歩いたって用は足せるぜ  
インターネットの時代でも小学校の運動会は花火を打ち上げて知らせてるじゃないか  
光回線が普及したって 五感を通して感じとるしかないんだよ 真実ってのはね だろ  
なのに なぜそんな番組がはじまるのを心待ちにしてるんだよ  
平井さんの天気予報コーナー  
「こんばんは」って人柄がにじみ出るような言い回しが好感度高いのは分かるけど

生きるそばからツバを吐きかけるのはやめてくれないか

---

ねえ 父さん

ヒヤシンス委員じゃどうしてだめなの

誰かがヒヤシンスのめんどろをみなきゃ育たないじゃないか

そりゃ学級委員じゃないけどさ

僕に任されたのはヒヤシンス委員なんだ

せめて風紀委員ならなんて言い方しないでくれよ

いつだってそうだ

ねえ 父さん

僕は父さんの何に依れば 父さんの気が済むんだ

お願いだから 生きるそばからツバを吐きかけるのはやめてくれないか

本当に悲しくなるから

どんなことにも理由があるし

つまらないと思ってもやり通すことが大切なんだと言ったよね 父さん

どこへでもいけるし どんなことだってやれる

そう言ったよね 父さん

だからラジオ体操だって がんばって行ったよ

だけど 父さん

女の先生が担任になったとき

お前のせいだと言われた時には驚いたよ

何が僕のせいなの

僕の何のせいなの

なんでそんなことで僕の何かを決めつけようとするんだ

ねえ 父さん

スカートがきれいなの

ジャージを着てればいいの

男の先生なら文句なかったの

ねえ 父さん

お願いだから 生きるそばからツバを吐きかけるのはやめてくれないか

本当に悲しくなるから



## 二十の春

---

### 二十歳の春

雲は急速に流れ

人々は忍び足でやってきては

素早く去って行った

私は忙しく食事をし

明日に備えたが

何も起こらないことは分かっていた

誰かの拍手に応えようとしていた

それはいつもつきまどっていた

運命だとさえ思っていた

だが頭は加熱し

身体は自由を失ってしまっていた

ショウウィンドウのスポットライトが消えるまでは

長い間 見入られたように奇妙なステップを踏み続けていた

ブーツの踵はすり切れ

つまさきは破れてしまっていたが

あなたよりマシだと思っていた

本当にそう思っていた

## すずかけの道

---

すずかけの道っていうのがあるの

すずかけの道ってのがあったんだと思う

わー何年ぶりかしら 卒業以来だわ

卒業以来で何年かぶりなんだと思う

興奮しているみたいだね

そうなの興奮しているの

そうかやっぱり興奮しているんだと思う

長島一茂 見たことがある

うん 教室の外で友達を待っているときね 前を通ったの

そしたら 友達があれが長島一茂だって教えてくれたの

へー

教授に会ったらどうしよう

あれ教授じゃないか

一瞬似てるなあって思ったの

あんな感じなのかと思う

「しおり」っていう喫茶店があってね よく行ったの 今もあるかしら  
流行っていたからあると思うけど

それでね うらの方に山小屋があってね 趣があってね

でも取り壊すって新聞で読んだんだけど なかったらどうしよう

なかったらどうするんだろうと思う

本当に卒業以来なんだと思う

その頃 今と変わらない君がここにいる

今と変わらない僕は君が見たこともない町で夜じゅうテレビを見ていた

その頃 今と変わらない君は池袋駅の南口を目指し

教授のゼミに出席し すずかけの道を歩いていた

笑って笑って笑って 少し悲しみ

その頃 今と変わらない君は掲示板の経済学部のところを見て

山小屋で友達と会い 「しおり」でミルクティーを注文した

笑って笑って笑って 少し悲しみ

僕は君のいたこの場所を心に刻む

君とここを歩く間 その頃の君がすずかけの道を歩くのを心に刻む  
そして 今でも君が変わらずにすずかけの道を歩いていることを  
無くなってしまった山小屋に僕は告げた  
笑って笑って 少し悲しみながらも...と

ねえ 母さん

---

なにか忘れていたような気がするんだ  
でも母さん それは何だったのか思い出せないんだよ  
セブンイレブンに行けば分かることだと思ったんだけど  
イトーヨーカドの中までくまなく探したけど見つからないんだ  
もう数千キロを旅してる気分だよ  
どこかで見落とししたのかな  
何か知ってるんなら教えてよ ねえ母さん

千葉そごうにいったほうがいいんだったら行くよ  
でも新宿高島屋まではかんべんだ  
総武線なら本八幡までだ  
だってコルトンプラザがあるじゃないか  
おおかたのサラリーマンは江戸川を越えたりしないよ  
そんなことするからサービス残業を喰らってしまうんだ  
たいがいにしとかなないとそこからジャンプするはめになるんだよ

ビデの調子がおかしいんだって  
そんなのおしりをちょっとずらして  
おしりぼたんを押してすませればいいことじゃないか  
そういうことじゃないのか  
ねえ母さん 男のオレには分からないよ  
トイレ中にマイナスイオンが溢れていることもね  
だからねえ 母さん 何か知ってるんなら教えてよ  
もう数千キロを旅してる気分だよ

## 明日 出かけて行く

---

いまの状態が  
よくなかったことは  
分かっていたね  
そして終わりに近づいていたことも  
どの地図を開いても  
もとに戻ってきてしまう  
出口はあったんだけど  
入口が見出せなかったね

窓の外ばかり  
眺めていたね  
お互いの目ばかりを  
のぞき込んでいたね  
ペン先でつつきあたりしたね  
だらしくくずれてしまっていたね

僕は明日出かけて行く  
だから今は君のそばで過ごす  
明日必ず出かけて行く  
だけど今は君のそばで過ごす  
いつでも君のそばで過ごす  
だけど明日出かけて行く

ガリガリくんを知らない人はいても彼女を知らない人はいないんだし

---

彼女はいつだって僕らの胸にマスターキーを差し込もうとする  
ところは小さな町の小さなアパート  
ひとつ咳をするたびに彼女は階段を駆け上がってくる  
そしていつもの口癖 「悪い風邪とマスカラの女には気をつけなさい」  
そこは愛の奇跡 そこは彼女の愛の奇跡

向かうところ敵なしの彼女は誰よりもさりげなく笑い さりげなく要求する  
ある朝これから牛乳買うときはキオスクにしてねとしっかりした口調で言いながら僕らの首にスイカをぶら下げてくれたんだけどナナコ利用者の僕はナナコじゃだめなのかと思って「ナナコじゃだめなの」と声に出してる途中で人差し指を口に押しつけられ「当然でしょ」と言い切られたのが未だにイタイ

「当然」でしょの「当然」がすごく力強くてこれこそが本物の「当然」のようで当然のように圧倒されたことがいつまでも深いところにある  
噂だと町で一番の愛情を蓄えてたらしいけどそれを見たものはいない  
目に見えるような愛情じゃ愛情とは呼べないってことらしいけどそもそもそんなことを問題にする人たちは皆無

誰よりも多くのことを受け入れてきた彼女を賞賛する人はいても非難する人はいない  
例え大半が彼女の手には負えない出来事だったとしても彼女への評価が揺らぐことはなかつただって彼女は誰でもないあの彼女なんだから  
この町ではガリガリくんを知らない人はいても彼女を知らない人はいないんだし

僕らは日に日に自由が効かなくなり 自分らでも情けないくらいひとりぼっちを演じてしまっていてそれでも僕らは彼女のようなものを振り払おうとして大きく深呼吸をしたり肩を回したりして僕らの存在が意味あるものであるのかないのかを確かめようとしたけどほとんどムリ

それで図書カードがいつのまにか使えなくなっていたのをブックスゴローで優良図書を買おうとした時に知らされてとても残念な気分を味わうことになるんだがそこで思い立って逃げ出すわけでもなく彼女の何とも言えない妙に甘酸っぱくて鼻の奥がチクチクするような眼球の裏あたりが麻痺したような刺激的な臭いに誘われてそそくさとまたあのアパートに帰って行ってしまいう毎日を繰り返している

そうして僕らは生きている かえすがえすも生きている そうさ生きていることがフツウなんだから だって死んではいけないからさ 生きてるだけさ 何となくね ぜったいにさ

それが生きるってことなんだよ たぶん

過ぎ去っててしまったことをいつまでもいつまでも何度も何度も繰り返し繰り返し愚痴るのは未練がましいわと朝起き抜けにコップ一杯の水を飲みながら彼女は言う

朝ご飯を食べたら次はお昼のことを考えるべきでそして次は夜ご飯でしょ そして寝たらまた朝ご飯 一日3食は欠かせないのよ いいえ欠かすべきではないわ とけっして誰かが口を挟まないようによほど気を遣いながら割と急いでしゃべる

肘掛けのついたとてもお気に入りの椅子に座って 肘掛けをさすりながら  
そしてこれまたお気に入りの特注品のステンドウガラスがはめ込まれた窓をウツリ眺めながら  
歯切れが良いのだが僕らの耳には届きづらい声でしゃべる

お気に入りらしいけど座っている間何故だか落ち着かないようにみえるんが少し切なくて笑ってしまうんだがそんな僕らの些細な笑いさえも見逃さない彼女はキッとした顔を僕らに向けてさっきよりも滑舌よくしゃべる「笑うには遅すぎるわ 悪い風邪とマスカラの女には気をつけなさい」

どうにかして口を挟みたい僕らは 拾った石に意志を込めてポケットの奥底に忍ばせてあってとにかくいつか彼女が後ろを向いた隙にステンドウガラス目がけて投げつけることだけを当面の目標に据えてたりするんだけど実際のところそんなことできる分けないから今では生涯の目的になってたりするんだけどそのせいだと思うんだけど何だかずいぶん気が重くてグズグズグズグズいつまでもいつまでもくよくよ考えながら彼女のご自慢のステンドウガラスと肘掛け椅子の黒光りした肘掛けのところをずいぶん遠くから眺めている

そうして僕らは生きている それだから僕らは生きていける 彼女が生きているように僕らも生きている どうかすると彼女以上に僕らは生きている そうやってこれからも生きてみせる

## 次の一日

---

そんなに考え込んだって仕方のなかったことさ  
捨てていくものと拾いあげるものとの別れただけさ  
いつだって右か左に別れてしまう  
みんなが気づかないうちにね  
だから次の1日を急ぐことだ

もう取り返しのつかないことぐらい知ってるだろう  
片方だけがよかったためしなんてないじゃないか  
みんなだって知らないことのほうが多いんだよ  
どうかすると道は無数にあるかもしれない  
とりあえずは次の1日を急ぐことだ

それからのことは予測に値しないんだ  
どんなにたいへんなことだって  
終わってみれば他愛のないことさ  
僕たちの知らないことの方が多いんだから  
とにかく次の1日を急ぐことだ



## 哀れな女

---

ほかの男に抱かれて  
変わっちゃった君を  
今さらこの僕にどうしろという  
君はあのとき言ったじゃないか  
あなたはこども過ぎるひとねと  
だから僕も言ってやるさ  
君は哀れな女だ

時はいつの日にも  
流れる川のようにだね  
あまりにせつなく心地よく流れる

君さえいてくれたならと  
思い続けていたよ  
どうしていなくなってしまったのか  
分からず途方にくれた

君の髪にキスをする  
君のからだをまさぐってみる  
君の足で歩いてみる  
君の言うように言ってみる

僕はここにいるのに  
僕のほうがいいのに

君は哀れな女だ

## がんばってここに来いよたかおちゃん

---

決してへこたれなかった たかおちゃん  
内股で歩いてたけど堂々としてた  
誰もなじったりしないし 誰からも疎んじられたこともない  
すごいなで肩のたかおちゃん  
そのすごいなで肩を 激しく左右に振りながら なよなよ走ってた  
そういえば普通に早かった ビリじゃなかった  
それが ある日 縁側でおちんちん出して日向ぼっこしてた  
俺のせいか たかおちゃん 何度か笑ったことあるけど  
そんなつもりじゃなかったんだ たかおちゃん  
ごめん  
みんなに優しくかった たかおちゃん  
決して負けなかった たかおちゃん  
庭にバイクを置かせてもらってありがとう  
雨の日にバイクで走り回って庭をぐちゃぐちゃにしてしまっただごめんなさい  
大学に行ってた たかおちゃん  
俺のことを呼び捨てにしてくれてありがとう  
俺に笑いかけてくれてありがとう  
三年間 俺の近くにいてくれてありがとう  
テニス部の部長をしてた たかおちゃん  
ここにあるのに たかおちゃんの生きるスペース  
頑張っここに来いよ たかおちゃん  
そんなとこでくすぶってるなよ たかおちゃん  
もう一度ここに来いよ  
みんなで待ってるから

## それでヤマダ電機だ

---

洗ってる時ドスンドスンとうるさい洗濯機

一日4回 朝2回 夜2回 そして時には深夜1回

一年365日 休まらなかったどっしりとした洗濯機

9月8日の午前7時03分

壊れた

実働年数9年と2カ月

途中2回ほど修理をよんだ 割とタフな洗濯機

「また出てきてる この洗濯機！」乾燥モードに入ると踊りながら前にせり出してきてはのり子さんに悪態をつかれたほんとに無骨な洗濯機

もとの場所に押し返すのはもっぱらオレの仕事だったけどそんなに嫌いじゃなかったぜ洗濯機

今回も修理考えたけど

そろそろかなって

まだいけるんだろ 分かるさ

でもやっぱり重いんだよ 押し返すときにさ

嫌いじゃないけど週一だと考えちゃうんだよな

それでヤマダ電機だ

新しいの届くよ今日

## アンバサダーホテル

---

やっぱりアンバサダーホテルだと思うんだけど

やっぱりアンバサダーホテルだよ

ぜったいアンバサダーホテルだよな

どうみてもアンバサダーホテルだよ

アンバサダーホテルしかないって

ですからアンバサダーホテルですから

## 見えない雨が降る

---

おかしいなとは思ったの  
誰も彼もがやさしくなるなんて  
考えるだけで幸せになれるなんて  
まるで夢のようだったわ  
快適な部屋の食卓にはいつも食事の用意がしてあって  
それぞれの席にスポットライトが当たっていて  
テレビがとっても楽しくて  
雑誌がとってもカラフルで  
新聞に真実が載っていて  
友達とはいつもメールでつながっていて  
青空ばかりが続いて  
夜は夜じゃなくなっていて  
毎日が特別な日になっていてフツウの日なんか数える程度に減っていて  
きょう特に考えることもなくて  
あした差し当たって考えることもなくて  
きのう考えたことを忘れていて  
けど思いもしなかったわ  
そこら中に見えない雨が降り注いでいたなんて

## 見えない雨が降る 2

---

言葉を交わすことはあっても心を通い合わせたことはなかったわ  
だから後ろのドアはいつも開けておいたの  
いつでもすぐに出ていけるようにね  
だけどそのドアを通り抜けることはなかった  
新宿までは行けるんだけど  
そこからさき結局のところどこに行けばいいのか判らないし  
青梅街道を西へ向かってどんどん行こうとするんだけど  
暑かったり寒かったり  
寂しかったり悲しかったり  
辛かったり独りだったりするんじゃないかって  
ずぶ濡れになったりするんじゃないかってずーとっていて  
快適な部屋の食卓の椅子から離れられなかったの

けど思いもしなかったわ  
部屋中に見えない雨が降り注いでいたなんて

## 見えない雨が降る メリーな日々

---

みんな見ていた  
ゆっくりと変わる  
メリーな日々  
あわてるでもなく  
落ち着いてるわけでもない

感じていた  
見えない雨が降るのを  
ずぶ濡れになった身体の体液と少しずつ置き換わっていくのが分かる  
悪くなかった  
むしろ良いくらい  
いやすこぶる良い  
246を通過して南西諸島へだっていける  
実際 357を通過して九十九里まで何度も行った

少し荒い呼吸を繰り返す  
首筋から滴り落ちる汗が乳首をかすめる  
いつものことだから気にしなくていいのに  
目覚めているいくつかの細胞が拒もうとする  
小さな声で言ってあげる  
大丈夫だからほんとうに

許そうと思った  
私を  
許そうと思った  
私だけを

何事も期待しすぎるのはよくないよ 隣の山下さんが言ってたけど  
時間指定してあったって期待通りにゆうぱっくが届くとは限らないんだから  
町内中が期待しあったって 期待が期待を生んでそこらじゅう期待だらけになっちゃってうっかり  
すっかりへたり込むだけだぜ  
バハマに行ったことがあるかい 唐突だけど  
僕もないけど バハマは良いらしいぜほんと  
なにが良いのか分からないけどバハマだからね とにかく  
ゆうぱっくなんかないぜ バハマには  
時間指定された時間に家にいなくたって良いんだぜ バハマだから  
急な用事で外出してもいいんだぜ バハマは たぶん  
ぜったいその時間に居なきゃいけないことなんてないんだから  
不在票が入ってたとしても恐縮したりすることも無いんだぜ たぶん バハマって  
それに 電車で駆け込んだって 危険ですから駆け込み乗車はお止めください なんて どうか  
すると 車内放送で怒鳴られたりすることも無いぜ バハマだから  
だからそんな誰かの期待に応えようとしなくても良いんじゃないかな バハマじゃないけどさ



バット

---

ごめんな バット買ってやれなくて

本当にごめんな

何とかしようと思ったんだけど 後のことを考えるとさ やっぱり無理だったんだよな

バットぐらいと思ってお金用意して誘ったけど

いいよって言うから そうかなんて言っちゃったけど

実のところホッとしたんだけどさ

だけどやっぱり買って上げればよかったな って今になって思うよ

バットぐらいってさ

その日暮らしの 轟 渡  
持ってるお金は常に小銭だけ  
いつも斉藤さんに千円借りる  
長身を折り曲げてとても濟まなそうにして  
食事は食べたり食べなかったり  
それでもタバコは欠かさず吸う  
値上げになっても止めたりしない  
酒も好きだから金が入ったら飲み屋で飲む  
口ぐせは 俺の人生 終わってますよ

勤めは警備会社の契約社員  
契約社員だから安定しない  
月に15日働ければばマシな方  
日給7000円だから暮らせるはずがない  
とうぜんのようにサラ金に借金がある  
アパートの家賃も遅れがち  
国民年金の支払いなんかとんでもない  
健康保険料さえ難しいのに

そんな轟渡も3年前までは建築現場で働いていた  
でも足首を複雑骨折して半年入院した  
その時は労災が適用されたのでよかったと思った  
でも退院したら仕事がなかった  
いままでのような身体に負担がかかる労働は医者がすすめない  
リハビリでやっと人並みに歩くことができるようになった  
とても昔のようには走れない  
40半ばの轟渡は途方に暮れる  
そしてやっと見つけたのが警備会社のアルバイト  
セコムでもなくアルソックでもなく そのへんの警備会社  
リストラ、破産、定年退職、中卒、そこにも余裕のない人たちがいて仕事を分け合っている  
おしゃべりな轟渡  
放っておくといつまでしゃべる  
けっして人をののしったりしない  
顔色を伺いながら喋る轟渡  
タバコと酒が好きで働き者の轟渡

そんなに気を遣わなくても良いのにと思えるほど人に気を遣う

懸命に働いてきた轟波

口ぐせは 俺の人生 終わってますよ

一度つまづいたらそれでおしまい

二度目はないと肝に銘じたりする

ついでに 俺の人生も終わりかなと思ったりする

そんな国にいる

あとせんにちいきれるぐれえーのえねるぎーがじゅうでんされたきぶんなんだよ

---

ああ だめだめそこはおれのせきだから だってからだはんぶんかかっているでしょ このねーちゃんに わかんないかな ほら つりかわつかまってるみぎてがねーちゃんのかおせんたいにかかってて みぎあしがねーちゃんのからだのちゅうしんをつらぬいてるじゃん ね そうでしょ それでおれのからだみぎはんぶんがねーちゃんのみぎはんぶんをかばーしちゃってるじゃん だからここはおれのせきなのおれのよそうだとあと3つくらいでおりそうなんだよね だからわるいね そこおれのせきだからほかあたってくれる

ああ そこね そこもおれの だっておれのひだりあしがおっさんのひだりあしにかかっているじゃん ね みてみて よごれてるけどこのひだりあしのくつ ずいぶんみがいてないなとかおもっているとおもうけど けっこうしたんだよ このかわぐつ 2まんえんのやつが1まんえんだったんだよね

だから はばひろこうだかではいたらほんとうはきゅうくつでいたかったんだけど そごうのくつうりばいっしゅうしたうえで だいじょうぶです これくださいとつかいちゃってかっちゃったんだよね はばひろこうだかなんだけどほんと さいしょはきゅうくつで おうじょしたよなじませるまで

あんだだからいうけど10ねんはいてんだよ このくつ やっとさいきんなじんできてね いちにちはいててもいたくなくなってきたんだよこのくつ なにしろはばひろこうだかだからさ

それでなんだっけ あっそうそう このおっさんがすわっているところね そういうわけでここもおれがねらったりするんだよね わかるでしょ まだそんなにこんでないしね あんたもどこか だぶるでかくほしたりしたほうがいいんじゃない まだわかいじゃない すわろうとかせず いちじかんぐらいたってたってだいじょうぶだろ

あーちょっとまって やっぱやめとくわ このおっさんのせき もんだいだよな おっさんのとなりのにーちゃん ゆらゆらしてるじゃん おっさんもめいわくしてるじゃん やさしいねおっさん ふつうのかおしてにーちゃんのかおというかあたまをかたでうけとめてあげてるよ みたかたはずすとかおしかえすとかしないんだ おとなだよな おれなんか がしてかたあげてはねのけたりするんだけどな やっぱり そうでなくちゃいけないよね みんなつかれてるし すこしのあいだぐらいかたかしてあげてもいいかなっておもったりするよな こういうひとみてる

でもしょうじきななし ひとえきでもはやくすわって ねむりたいんだよね いねむりしてると ほんときもちいいよな ばくすいできたりすると そのひいちにちがかいちょうなんだよね

だから こうやってせきねらってるわけだけど  
でもここはやめとくわ となりでかっくんかっくんやられたら ねてらんないし かえっていら  
いらしてすとれすとかたまっちゃうから このみぎのねーちゃんにかけるよ 2とおうものは  
1ともえずってことかな かんがえてみると そういうもんじゃん じんせいってさ ひとつの  
ことをほりさげていくとみちがひらけたりすることない

ばかみたいにまいにちおなじようなしごととしてて なんのためにこんなことやってんのかなーっ  
てかんがえこんだりしていると あんまりくちきかなかったやつが なんだか知らないけど あ  
るひ おもいがけずおつかれさまとかこえかけてきたりしてさ それで ええっておもったりし  
て おれってすてたもんじゃないなとかおもったりしてさ

いや わかってるよ ただたまたまこえかけてきただけなんだろうけどほんとに だけどさ  
それって あいつのなかでおれがそんざいしてるのがかくにんできたってことじゃない それ  
で おれってまんざら...っておもったりするわけさ どうでもいいけどさ でも それで あと  
せんにちいきれるぐれーのえねるぎーがじゅうでんされたきぶんなんだよ おかしいかな それ  
って そういうもんじゃない ひとつって

生きるそばからツバを吐きかけるのは止めてくれないか

<http://p.booklog.jp/book/73553>

著者 : sakamoto

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/karatake07/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/73553>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/73553>

電子書籍プラットフォーム : ブクログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社ブクログ